

白金蔵

11月号



平成 30 年 11 月発行

第 92 号

定例句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

増田陽一

十二月二十一日（金）第四正午～三時・白鳥、枯芦

一月十八日（金）第五正午～三時・新年一般

二月十六日（金）第五正午～三時・吹越、野焼

兼題参考句十二月二十一日分（白鳥、枯芦）

白鳥が首を埋めて白き塊

山口誓子

白鳥の千羽乗りたる池の面

佐藤喜孝

頸捩る白鳥に畏怖ダリ嫌ひ

佐藤鬼房

枯芦を金色の日がつつむなり

柴田白葉女

古利根や枯蘆に日の留まる

中村千代子

十一月例会句会報

‘18／11／16 9名欠3)

光成高志

東の明けの明星翁の忌

芭蕉忌に霧のとばりの筑波山

死んだ人夢によく出る三島の忌

道過る身を伸すあれは鼬なり

錦木の紅葉に夕日射してゐる

滑り来て吾を突つけよ啄木鳥けらうづき

火の色の残像芦間の鼬かな

時雨忌の羽根破れたる鳴るて

短日や鳥宿る木の騒がしき

水は潤れ鯨逆立つ上野なり

佐藤宏之助

芭蕉忌へ水陸両用バスに乗り

貝塚の窪は落葉の吹き溜り

縄文の蛤の冷へ手に触れて

一穂を添へて新米届きたり

防空壕跡に鼬が棲みつけり

光みち

枯木なるいちぢくに見る天牛かみきりを

鼬の眼走る闇夜の沼辺かな

農道の轢死の鼬吹かれをり

芭蕉忌のポストに何か届く音

胴長の鼈轡かれて丸くなる

浅野正美

清澄橋船から眺め芭蕉の忌

武者昭七

日短か病院後に急ぎ足

つぶらな目秘めたる鬪志鼈かな

杜鵑草ほととぎす仲間増やして賑はえり

病院で大人のぬり絵冬隣

ウキウキと一步踏み出す芭蕉忌に

仲本興正

若さとは雲を追うこと桃青忌

芭蕉忌の川へ降りゆく村の道

時雨忌や百觀音をめぐる笠

いたち出てにはとり小屋の騒がしき

鼈走る追いつめるなよ叩くなよ

田宮敦子

金柑のひと枝活けるレストラン

築地市場跡は静かに秋日差す

芭蕉忌や蕪村について読んでおり

塩害の椰子の葉揺れて小鳥来る

飯田孝二

訃報二通同歳わないとしなり栗を剥く

相引きの出会いひ頭を畠の鼬

芭蕉忌の日溜り足の爪を切る

しぐれ忌の駅中撰ぶ握飯

入墨^{タツトウ}は医とも技とも桃青忌

窓の陽や鼈^{カニ}こつこにはしやぐ子等

軸かへる心の一文字芭蕉の忌

鎌鼬の痛む古傷小夜時雨

立冬の亀重なれる辨天島

礼拝堂に残る菊の香木曜日

県道に鼈の死骸そのままに

芭蕉忌や親しき友は俳句の師

立冬の暖ぬさのなかの庭仕事

夕暮れの橋の上より秋の富士

立冬やさらさらさらと朝の粥

一句鑑賞

芭蕉忌や奥の細道たどりたし

芭蕉忌には誰もがこういう思いを持つと思います。そういう気持ち、ほんとは願望を素直に書かれましたのが最高点の所以です。私は先の閑話休題に書いた手前もう

中川素子

吉羽多美子

火の色の残像芦間の鼈かな

陽一

鼈は素早い動きで出没するので凝視する暇はありません。芦間をよぎった、あれは鼈であつたと火の色の残像として鼈を云い止められたのです。尾も胴も長いのでその長さが眼底に残像として焼き付けられやすいのを色に親しまれておられる陽一さんならではの観察眼です。そういう思います。因みに鳥博物館に芦間の鼈の剥製が居ます。

軸かへる心の一文字芭蕉の忌

素子

芭蕉忌になつたので「心」一文字の掛軸に変えたのです。この心ばえを想像してみると、芭蕉の接觸した仏頂禪師や明の渡来僧の心越師の影響を受けた芭蕉の禪思想の心ではなかろうか。そんなに難しく考えなくても軸を掛け替えてたまたま芭蕉忌であつたと気づいたのかもしれない。それをきっかけにして芭蕉を思ったのだ。

芭蕉忌へ水陸両用バスに乗り

宏之助

大阪御堂筋の南御堂での芭蕉忌はその前が芭蕉終焉の地である因縁から毎年挙行され、誓子先生は選者を務められました。こちらの東京では深川の芭蕉記念館で同様に芭蕉忌が行われています。その芭蕉忌に先に見た中川

のスカイダックという水陸両用バスに乗り、小名木川から大川を上りやつて来ました。現代文明の恩恵を受けてどうも苗蕉さん悪しからずということです。

一句鑑賞

苗蕉忌や奥の細道たゞりたし

祖師苗蕉を敬慕する人は、みな「奥の細道」の聖地巡礼の願望を胸に秘めている。その見果てぬ夢を素直に吐露、技巧を弄さない「雕啄して朴に復る」ような平明な表現の作句で共感を呼んでいる。

鼬の眼走る闇夜の沼辺かな

鼬といえば俊敏で危険な害獣という印象で、「鼬の横切り」、「鼬の道」など俗信でも忌まれる存在だ。いかにも化け物が出そうな闇夜を沼沿いに行くと、前方に人魂ならぬ鼬と思われる光る眼が過ぎたのである。

鎌鼬痛む古傷小夜時雨

素子

鎌鼬は諸説あるが、空氣中の真空現象?などで負う一種怪奇な裂傷をいう。冷たい通り雨が降る冬の夜、その切り傷が痛み出すのである。鎌鼬も小夜時雨も冬の季語で重なるが、相まって時雨忌のある旧暦十月頃の侘しい山家暮らしを連想させ独特の俳趣を醸している。

磯貝健一

昭七

みち

農道の轢死の鼬吹かれり
都會化で鼬の生態を眼にすることがほとんどないが、稀に轢死体を見る。棲息する田野と機械文明の交差する農道であえなく非業の死を遂げた鼬。その哀れな死骸の上を悲風が吹き抜けるのを作者は見たのである。

つぶらな目秘めたる鬪志鼬かな

鶴小屋を襲うなど小さいくせに獰猛な鼬は嫌われ者だが、実は丸くて可愛い瞳の持ち主。秋に臨めば君子豹変して悪魔になる。生きんがための旺盛な活力を蓄えた小動物の二面相的プロフィールを髣髴させて妙。

防空壕跡に鼬が棲みつけり

宏之助

今、鼬が棲んでいる穴が、かつて防空壕だったと知る者は自分くらいかと、戦後七十余年、遠い戦争の記憶を想起してしみじみ思うのであった。

胴長の鼬轢かれて丸くなる

みち

敏捷に山野を横行していた鼬が車に轢かれて、無念の横死を遂げた。生前の胴長の体躯を縮めるように丸め横たわっている小動物を目にして、哀れんでいるのである。

一句鑑賞

増田陽一

計報一通同齡おないどなり栗剥く

知人の計報が舞い込むようになったその計報の主の年

みち

齡が二通とも同じであった、更に受け取つた作者自身の年齢とも同じで、三人とも、とも読めるのである。互いに生きて来た年月を想い、栗を剥きながらも肌寒が身に沁みる昨今である。

貝塚の窪は落葉の吹き溜り

宏之助

大森貝塚での嘱目だそうである。縄文期の遺跡で日本の考古学者発祥地となつたところ。「遺跡庭園」に発見者E.S.モース博士の像もある。「貝塚の窪」の語が発掘の現場を連想させ、古代から今日まで延々と落葉が降り積もつては消えて行つたであろう時間を想像させるのである。

芭蕉忌に霧のとばりの筑波山

高志

芭蕉忌になんて筑波山か、と少し考えた。そして筑波はヤマトタケルが東征のときに「新墾、筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と唱えた場所である。それが俳諧(連歌)のはじまりと言う謂れはなかつたか? とすると始祖と俳聖が長い歴史を隔てて呼応している、文芸の壮大な歴史が背後にある。始祖の山は遠く霧の彼方に鎖されてあるのだ・・・と読むのは如何でしようか。

胴長の鼈繰かれて丸くなる

みち

兼題の鼈の句にはみな苦心の跡が伺えた。なかなか目撃できるものではない故、「鼈」のイメージに依りがちである。(それがいけない訳では決してないけれど) なかで

この句は偶々出合つた現場での、胴長が丸くなつた、という、カワイソウなどという以前の視覚的印象で出来ていてリアルな予期しない可笑しみで成功している。一寸大げさに言わせて貰うなら、戦後、「生活綴り方」の時代に称揚された「無垢な少女の目」に近いもの。

平野ひろし先生追悼文

光成高志

お便り広場の小泉博さんの文面のように本誌と交流を重ねていました彩主宰のひろし先生が急逝なされました。彩の人達も詳しいことは不明のこと、宏之助さんには夫人から喪中の挨拶状を受けたと聞きました哀悼の意を表さずにはおられません。ここにひろし先生のことを思い出して簡略ながら追悼文を書きます。誓子先生の天狼の元同人であられて誓子逝去後すぐに誓子俳句を繼承すべく「彩」を創刊され、今年で二十五年、そのお祝いの大会をもたれた様子が今年の春に野球帽を被つた丸顔のお姿で集合写真に見られます。昔、天狼八重洲句会は誓子先生の上京に合わせて月に八重洲ブックセンター向かいの国労会館で行われていましたがそこにはひろし先生はお出でにならなかつた。後で聞いたところ東京を離れて仕事が忙しかつたので出られなかつたと。その句会には静岡・栃木・神奈川・東京からの作家が集まつてお

り、三重からの岡田啓さんと同席したこともあり、その気になればお出でになることもできたのではないかと思つたことがあります。天狼同人欄は平畠静塔、佐藤鬼房、三橋敏雄、辻田克己、中村抜刀子など有名な俳人の名がすらりとあり、私は初学の頃であつたので恐怖の念がありました。今にして思うと私は天狼に導かれるようにその句会に出席したのである。朝日の選者のうち「おとうさんは誓子が合いますよ」といつてくれたのは当時の敏子、今のみちさんであつたし、筑波から本社の八重洲勤務になり、昼夜みの丸善と八重洲ブックセンターは立読みの楽しみな場所でありました。偶然誓子先生の東京句会が目の前のビルで夜行われていることを知り出席したのであつた。ひろし先生に会つたのはそこで知り合つた駿河岳水さんの記念句会後の懇親会の時、平成十二年秋であった。私の句会では女性が多いのにここでは男性が多い、うらやましい云々という挨拶を覚えている。後で思いがけぬ所でお目に掛かり嬉しく存じましたという文面とともに「常念」が送られて來た。これをきっかけにして「彩」が送られてくるようになつた。その時はワープロでの手作りの冊子であった。後に袋綴じのあれはワードの文字であつたと思うし、だんだん主宰誌が良くなつて行つて、五年毎の記念合同句集をいただいた。句集

も時を置いて出版された。私が平成二十一年の「塩見」を鑑賞したのは彩に掲載された。このときはU.S.Bで投稿した。付合いが深くなつて来たのでいつか吟行でもとの思いが募り、私から提案して先生のお住まいの富士市を訪ねたのが平成二十一年夏、二泊三日の吟行句会を全部段取りされて車で私とみちを案内された。宏之助さん、熊谷の三郎さん用平さんが参加された楽しい三日間であった。翌年に白金葭を創刊したので俳誌交換をお願いし現在まで続いている。平成二十八年夏には白金葭五周年記念句会に選者をお願いし銀座までお出ましをいたしました。このとき、云いおおせて何かある、を現代的に解釈されて、何かは詩のことだとよおつしやつたので、私がそれは間違ないと本誌にその解釈を載せたらすぐ私が間違つていましたというはがきをいただいた。私はこの素早さと率直さに感動したのをよく覚えている。よくお聞きしたのは、関西の人達に何かを送つてもうんともすんとも言わないなしのつぶてには参つたと。私もこれは同感であった。ひろし先生は現代の文明の利器を毛嫌いせずによく利用され、人とのつきあいでは必ず応答される、それも素早いのです。これを私は見習っています。赤沢宿のお返しをしなければならぬと心に留めていたのにそれがも果たせぬままお別れすることになりました。生も一

および眼耳鼻舌身意識等なり。また四枚の般若あり、苦集滅道なり。また六枚の般若あり、布施、淨戒、安忍、精進、靜慮、般若なり。また一枚の般若波羅蜜而今現成せり、阿耨多羅三藐三菩提なり。また般若波羅蜜三枚あり、過去現在未來なり。また般若六枚あり、地水火風識なり。また四枚の般若、よのつねにおこなはる行住坐臥なり。

（二）までが第一節である。般若心經本文の道元禪師による提唱であり、岡田利次郎氏は、まことに雄渾な筆致で、一気に書き下されています、とされ、正法眼藏の中に数々の名文があるがこの箇所などは氏の最も魅せられる所だと述べておられる。こここの文章を一々解説するのではなく、そのう図書が一杯あるのでそちらを読んで貰えればいと思います。般若心經一巻も膨大な大般若經六百巻も「空」の一字を説いていると言われているから、又芭蕉の古池やの句を代表として文芸の上で「空」の世界を創造したのが芭蕉であると栗田氏の云わんとするところであるらしいので、空と何ぞやをここで書いておきます。空とは梵語のシユーニヤターに当たる字であつて翻訳語である。梵語のシユーニヤターは、存在するものにはそれ自体、実体、我などという固まりなどというものはないという意味を表す。この実体のない「我」のないこと

を体験することが重大な意義がある。頭を通して解釈した世界では、こちら側に觀念的自我が立ち、向う側に我ならざるもののが立つ。どちらも觀念の產物であつて生きていません。動いていません。いわば固まりなのです。固まりだから実体があり、「我」があると認めやすい。とらわれやすい。「我」にとらわれた瞬間に生きているありのままの自分の持つ本来の主体性と自由性が失われます。人類の今もつてている哲學科学倫理学などもこの概念を組み立てて成立したものですから、もしこれを筋書き通りに形式的に推し進めたら人類を不幸に導くことは間違いません。発達した脳髄のはたらきを過信した人類の悲劇です、と書いてあります。釈迦は、尊称して釈尊はこの人類の悩みを自らの悩みとし、徹底的に妥協を排して、物の究極まで突き進まれました。そしてまず、頭を通してできる概念をこねくりまわして思惟することの有限性に気づかれ、さらにその奥にある「行」－サンスカラのはたらきにより即ち坐禅によつて一路内觀にむかわれたのです。この内觀の内は外に対する内ではなく、自分が自分そのものに向われたのです。観も一心に観る自分と観られるじぶんとの境がなくなつてしまつて観るのです。つまり「見ようとして見る、聞こうとして聞く、考えようとして考える」立場つまり自我からすり抜けて、

「見ようとしないで見る、聞こうとしないで聞く、考えようとしないでわかる」つまり無我、「見れば見っぱなし、聞けば聞きっぱなし、考えれば考えっぱなし」つまり三昧、すなわち生きているありのままの自分に生きられたのです。そこで、自他の対立が完全に外されて、主客未分の事実、「生きているありのままの自分」を直覚されたのです。自らの般若の智慧——悟りのはたらき、主客未分に生きる時の生命の自然作用——により、「自ら」を生きたまま把握されたのです。この過程は釈尊成道の時の七日間の釈尊の生命が自然にたどった道で、前人未到の道をゆく釈尊のご苦心は想像に絶するものがあります。そして、ここに釈尊が最後にぶつかった当体、それしかないものの、生き通しに生きているもの、これが「空」であります、とある。「空の当体」はどんな概念もかぶせても表せるものではありません。岡田利次郎氏はこれを「生きているありのままの自分」と表現されておられる。釈尊が今から一千五百年前菩提樹下に端座して明けの明星をご覧になつた刹那、「自分が明けの明星となつて輝いている」という事実を徹見し、「生きているありのままの自分」を手に入れられたのが仏法の起源です。釈尊をとりまく生きとし生けるものが、釈尊とまったく同じく生きている事実に気づかれたのです。生きとし生けるものはこれ

に気づかずに、ありもしない「自我」を認めてそれを中心に生活しているから、不平不満に明け暮れているのです。この「生きているありのままの自分」を発見して絶対満足の生活が送れるようにさせたいという仏の大慈悲からほとばしり出たのが仏法であり、「生きているありのままの自分」を自覺して、その喜びの領기가今日まで二千五百年続いているのが、「生きた仏道」なのであり、又の名を「正法眼蔵」というのである。それ自体とこれを体得するにはどうしたらよいかという心得が「正法眼蔵」九十五巻のうちの冒頭におかれた「現成考案」の巻であります。生きているありのままの自分は原子からできているのだから、宇宙のあらゆるもの、原子レベルでみれば、あなたもわたしもありません。けれどもそれはそこに存在する、物も原子の濃淡でしかないからそれとらわれることもありません。一元的な世界、これこそが真理で、私たちが自己と他者、自分と対象物という二元的な考え方になじんでしまつてわたしたちが錯覚をおこしているのです。この宇宙の真実に目覚めた人がお釈迦様であるのです、という表現をされる方もおられる。本来の自分は青空のようなものであるともいふ人もいる。現代は科学的に解明できた恩恵があるからこれに照らして考えても釈尊がいかに眞実を見通していたか驚くべき

ことである。

お便り広場（到着順、敬称略）

光成様 この度もお世話になりありがとうございました。当社の「喜怒哀樂」のことも国上寺の俳句大会及び駄句までも載せていただき重ねて感謝致します。みちさんと俳句の日々すばらしい毎日ですね。寒くなります。

ご自愛くださいませ。

木戸敦子 (10.30)

前略日頃、俳句結社「彩」と交流いただきましてありがとうございます。扱、この度緊急に訃報のお知らせをさせていただくことになりました。実は、「彩」結社主宰

の平野ひろし先生が突然逝去され、家族から十月二十一

日に家族葬を済ませたという連絡を受けました。私達もあまりに突然のことでした驚くばかりでした。それに伴い「彩」の今後につきましては、会員で検討しているところです。つきましては、俳誌等の相互交流もできない状況ですので、どうぞよろしくお願ひいたします。今まで長きにわたるご厚情に感謝申し上げると共にこれから貴結社のご発展を心よりお祈りいたします。まずは取り急ぎ連絡申し上げます。草々

〔彩〕俳句会代表

前略 白金葭 10月号拝受いたしました。その節みち様などにも迷惑をおかけしました。申訳ありません。秋

小泉 博 (11.3)

口から疲労感が抜けおらず気力横溢というわけにはいかないのが我ながら残念です。十一月の句会も遠慮しますので投句五句を同封しました。よろしくお願ひします。元気回復につとめています。たがいに頑張りましょう。

(11.4 昭七)

喪中欠礼のごあいさつ謹んで拝読いたしました。故お義母様のご冥福をお祈り申し上げますと共にご家族皆々様のご健勝をお祈念いたしております。年始など世の中が賑々しい時はかえってお淋しいものと存じます。格別お大切におすごし下さいますよう願つております。

二〇一八年十一月八日

所沢市 長屋璃子

お淋しい年末年始を迎えると存じます。誰もが通つて来た道ですがご供養と同時に仕事に埋没で少し淋しさ悲しさに距離を置かれてはと思います。白金葭、元氣そうですね。毎月のように違う姿を見せていただきありがとうございます。私共の会報、句についていろいろ云いたくもありますが皆一緒に遊び句会故、評は貰ることにしております。インフルエンザ猛威をふるつている由ワクチン打つて用心を。

11.11 璃子

今日十六日の句会には突然夫婦づれで参上してさぞびっくりされたことでしょう。足元が不安なのでついて来てもらいました。皆様に親切にして頂いて当人もよろこ

んでいました。有難うございました。イタチは子供の頃
鶴を襲つた光景をよく目にしたものでした。高志さんの句
「あれは鼬なり」は力強く句全体をしめくっています
ね。素子さんの「鎌鼬の古傷」の痛みは青春の痛みでし
ょう。

(昭七)
11.9

この間の句会会場「コビアン」もたまにはいいですね。
あそこはステンドグラスなど綺麗だし。但し話し声も多
いから俳論までは一寸。僕もだんだん呆けるのか、版画
の下書きを今やっているのですがなかなか出来ず苦しん
で居ます。時間があれば鑑賞文ももつと多く書くのです
けれど、このくらいで勘弁して下さい。急に寒くなつて
きました。お二人ともお身体御大切に。(11.10 陽二)

我孫子日記

10/19	例会
10/24	SOA
10/31	SOA
*	
11/2	日展
11/3	
*2	ハードフェスティバル
11/6	
*3	北総病院
11/7	SOA
11/12	
*4	ラーベンクリニック
11/13	同上
11/14	
*5	SOA-ラーベン
11/16	例会

* 阿頼耶識てふ種子三島の忌
* 芭蕉忌や飛行機雲も西して

日展や裸婦像百体武者一人

(みち)

*2 尾の長き鼬の過ぎり胴もそつ

(リ)

*2 河原鶴羽を拡げて扇かな

*2 ムナグロの白黒斑点美しき

*2 沼の丘彈け初めたる檀の実

*3 点々と青坊主の野ばつち哉

*3 廃田を黄となす背高泡立草

*3 塩害の枯芦原は焼かれしか

*3 癌細胞見つけてうれし初時雨

*3 時雨忌や木下街道煙雨中

*4 芭蕉忌や吾が名の姓の菩薩也

*4 芭蕉忌の夕日入り込む壁の地図

*4 眼前を一瞬過ぎる鼬かな

*5 身を長うして芦原へ隠る鼬かな

*5 農道を不意に過ぎつた鼬かな

*5 道過ぎる身を伸す魑魅は鼬なる

小春日や病院ロビーに時計鳴る

(みち)

編集後記

昭七さん正子夫人同伴にてお出でになり選句選評を賜
りました。これからも同様にお願いできれば幸いです。

白金霞十一月号(通巻第九号) 平成三十年十一月三十日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 二七〇・一二一九 我孫子市南新木一四一七
表紙の題字・加納綾女 同写真は平成三〇年一月三十日の白金霞